

大学教育学会 課題研究活動報告書 (2023 年度)

提出日 2024 年 3 月 25 日  
報告者 西野 毅朗

|              |  |
|--------------|--|
| 課題研究テーマ      | 学士課程における卒業研究教育の目標・評価・方法  |
| 代表者 (所属)     | 西野毅朗 (京都橘大学)   |
| メンバー (所属)    | 山田嘉徳 (関西大学)、岩田貴帆 (関西学院大学)、篠田雅人 (早稲田大学)、山内洋 (大正大学)、土井義夫 (朝日大学)、川上忠重 (法政大学)、服部律子 (奈良学園大学)、佐々木誠 (秋田大学)  |
| 担当理事         | 串本剛 (東北大学)   |
| コメンテーター (所属) | 山田礼子 (同志社大学)   |
| 実施した活動       | <p>(1) 研究会の開催<br/>メンバーによる非公開の研究会をオンラインで 3 回、対面で 1 回開催した。研究会では、本課題研究の趣旨や研究計画に関する議論、質問紙調査やインタビュー調査の内容や方法に関する議論、卒業研究指導を実際に担当している教員による事例報告と質疑応答などを行った。中心メンバー (西野・山田・岩田) については、研究会とは別にミーティングを繰り返し行い、課題研究の具体化や進捗管理を行った。</p> <p>(2) 質問紙調査の実施<br/>質問紙調査は、2023 年 7 月から 8 月にかけて全国 5370 学科の教育責任者を対象とした郵送法で実施した。その結果、1446 件の回答が得られた。</p> <p>(3) 課題研究集会におけるシンポジウムの企画<br/>2023 年 11 月 12 日に北陸大学で開催された課題研究集会において、シンポジウムを企画・実施した。シンポジウムは、①趣旨説明、②全国調査の結果報告、③人文・社会・自然・保健の 4 分野における卒業研究教育の事例報告、④フロアーからの質問やコメントを踏まえたパネルディスカッションを行った。</p> <p>(4) インタビュー調査の実施<br/>質問紙調査の結果を元に、対象学科を選定し、2024 年 1 月から 3 月にかけて教員 26 名と学生 5 名を対象とした卒業研究教育に関するインタビュー調査を実施した。</p> <p>(5) フィールド調査の実施<br/>所属大学の卒業研究教育に関わっている 5 名の共同研究者にフィールドリサーチの依頼を行い、観察調査やインタビュー調査を実施した。</p> |

|               |  |
|---------------|--|
| <p>成果</p>     | <p>(1) 「卒業研究教育の研究」 WEB サイトの開設<br/>     課題研究の進捗や成果を一般に公開する目的で WEB サイト (<a href="https://www.fp-up.com/">https://www.fp-up.com/</a>) を開設した。大学教育学会の課題研究ページからもリンクしていただいた。2024年3月24日現在で、731名(実人数)が訪問している。特に、研究成果(実態調査報告書)へのアクセス数が623件と非常に多くなっている。これは、質問紙調査協力者への結果のフィードバックとして本サイト URL を案内したためと考えられる。</p> <p>(2) 質問紙調査結果の共有<br/>     質問紙調査によって得られた回答を記述統計により分析し、全国の傾向と分野別の傾向について明らかにした。<br/>     本結果については、2023年度課題研究集会における課題研究シンポジウムⅣの中で要約して報告した。その内容は、大学教育学会誌第46巻第1号に掲載予定である。また、質問紙調査の結果について記述統計の分析結果を「卒業研究等の実態調査報告書」としてまとめ、上述の通り、WEB サイトでも公開している。</p> <p>(3) 卒業研究評価基準事例 50 件の公開<br/>     質問紙調査の中で、卒業研究の評価基準も収集した。そのうち、公開許諾が得られた 50 件を「観点型」「ルーブリック型」「シラバス型」「履修要項型」「ガイドライン型」「その他」に分類し、WEB 上で公開した。</p> <p>(4) 日本経済新聞への掲載<br/>     共同研究者である山内洋教授の卒業研究教育を含む文学教育に関する考え方が、2024年1月16日付の日経新聞に掲載された。これは、課題研究シンポジウムでの山内教授の事例報告がきっかけになったものである。</p> <p>(5) DP を意識した卒業研究評価ルーブリックの開発<br/>     共同研究者である佐々木誠准教授の協力の下、秋田大学理学療法専攻における卒業研究の評価基準として、同専攻のディプロマ・ポリシーを踏まえたルーブリックを新たに開発した。専攻会議においても本ルーブリックの試行が認められた。</p> |
| <p>残された課題</p> | <p>(1) 質問紙調査結果のさらなる分析<br/>     質問紙調査によって得られた膨大なデータについて、さらなる詳細な分析を行いたい。具体的には、推測統計を用いた量的アプローチによる分析や、自由記述内容を対象とした質的アプローチによる分析を試みる。</p> <p>(2) 評価基準事例の分析<br/>     分析対象としての使用許諾を得た卒業研究の評価基準について分析し、その体系について明らかにしたい。とくにディプロマポリシーとの関連づけの方法や、最低基準の設定法など、卒業研究の評価基準がいかなる多様性を持っているかを具体的に示していく。</p> <p>(3) インタビュー調査結果の分析<br/>     2023年度内に実施済となっている教員 26 名と学生 5 名のインタビューデータを文字起こしし、質的分析によって卒業研究教育の姿を描き出</p>  |

|  |   |
|--|---|
|  | <p>したい。</p> <p>(4) 卒業生調査の設計</p> <p>卒業研究教育のダイナミズムを理解するために、卒業研究を経験した卒業生を対象とした調査を新たに検討したい。この調査により、学習者の立場から卒業研究教育を捉え直すことを試みる。</p> <p>(5) フィールド調査の推進</p> <p>2023年度は、現場の理解を主目的としたフィールド調査であったが、2024年度は具体的な評価基準や事例を用いた評価練習の実践をとり入れたフィールド調査を試みる。これにより、評価を取り入れた卒業研究教育法の在り方を模索したい。</p> |
|--|---|